

メタスタ

○能舞台
シテ（龍神）
地謡
中年夫婦
犬

○鶴ヶ城城内
爺 1～爺 n
婆 1、2
おばさん
ボランティアガイド
夫婦
城内アナウンス
福島市内からきた観光客 1、2
週刊少年ジャンプを買いたい男

○飯盛山
男
女

○喫茶室 KURA
伊織
圭子
西
女性客 1、2
さまざまな声

会津能楽堂。
シテ（龍神）と地謡がやってくる。

地謡が謡いだし、シテ（龍神）が舞う。
演目は「岩船」

「八大（はんだい）龍王は海上に飛行（ひぎょう）し、御船の綱手を手にくりからまき

汐にひかれ波に乗って、長居もめでたき住吉の岸に宝の御船を着け納め。
数も数万（すまん）の捧げ物、運び入るゝや心の如く、金銀珠玉は降り満ちて
山の如くに津守（つもり）の浦に、君を守りの神は千代まで榮ふる御代とぞな
りにける」

犬が通り過ぎる。
犬がおしっこをする。
世界が犬の視点になり、配置が変わる。

中年夫婦が歩いてくる。

夫「……」

妻「あんたもう一万歩なったんじゃない？ 能楽堂んとこまで来たよほら」

夫「……」

妻「見てみなさいって、万歩計」

夫「……」

妻「見れるでしょ、歩数」

夫「……」

妻「水筒、飲む？（水筒を振って）あらァ、氷溶けちゃってる」

夫 妻に顔を近づけ「イシツブテは捨ててもいいんだよな？」

妻 夫のスマホを覗き込み「んー？」

夫「あとイトマルもいらねえってったよな。あといらねえの何だっけ」

妻「……」

夫「コラッタは？ コラッタも送っといたほうがいいな、これな」

妻「歩数見れるでしょ、見れないの、いろいろ選ぶところあるでしょ、歩数見てみなさいって」

夫「うん」

週刊少年ジャンプを買いたい男が散歩している。

ジャンプ「……あ、もしもしナナミさん？ 起きた？ あのさあ今オレ博物館の近くにいるんだけど、小銭持って来てくれない？ ジャンプ買うのに手持ちじゃ 100 円足りなくてさ。……え、聞いてる？」

ジャンプ「もしもし？ え、なんでそんな機嫌悪いの？ は？ いやそれはわかってるけど。ちょっと……あ」

ジャンプ「切りやがったあの女……」

鶴ヶ城敷地内。

犬が城内に入り込んでいる。

爺1～爺nが入口付近に固まって城内の風景を眺めている。

爺1 「ここの桜がきれいなんだな」

爺1 「ここの桜がきれいなんだよ」

婆1と2が通り過ぎる。

婆1 「中には入らないけどオ、ここ、ぐるーって回ろうと思って」

爺1 「ここの桜がきれいだったよなあ。ここ来たとき、桜がきれいだったんだよ」

婆1が石碑を読もうとする。

婆1 「だいまよう なんとか しょう いちい はんしゅ つるがじょう」

爺1 「ここの桜がなあ……」

老夫婦とボランティアガイドが歩いてくる。

ガイド 「あの、石垣がね、これは枡形と言って、ひとつめの門を越えると壁に囲まれた空間があるんですね。これは、敵に攻め込まれた時、必ず道が突き当たって横に曲がらな

いとふたつめの門に進めない。真っすぐ行けば攻める速度は変わらないけど、曲がらなければならぬから速度が下がる。そのあいだに石垣の上からそれを弓や鉄砲で攻撃して侵攻を阻むことができる、ということなんですね」

おばさんが電話しながら、両腕を大きく振り踵から着地する健康ウォーキングをしている。
おばさん「あたし？ あたしだからお城よ。今、藤の花、ここにほれ休憩所、あったでしょ？ そうそう。ごめんね朝の、うん、忙しい時間、うん、ごめんね。うん。じゃあねどうもね」
世界がおばさんの視点になり、配置が変わる。

おばさん「あら、やだ、汚い犬がいるわ。まー、やあねえ、汚い」

放送 「お客様のお呼び出しを申し上げます。JTB 東北旅物語でお越しの綾瀬様、五十嵐様、出発時刻が過ぎておりますので、本丸入り口までお越してください。JTB 東北旅物語でお越しの綾瀬様、五十嵐様、出発時刻が過ぎておりますので、本丸入り口までお越してください」

おばさん、クールダウンの体操をする。
おばさん「ああいうのに……餌やる人がまたね……いるんだから……まー……ねえ……もう……」

観光客1 「会津で正解だったねえ、この陽気じゃ」

観光客2 「ここでこれだけですからね、福島ならもう二、三度は暑いですね」

観光客1 「ねー、やっぱりね、涼しいわ」

ふたり、しばらく話をして、盛り上がる。

観光客1 「……会津の人は今も山口の人を嫌うって言うね」

ジャンプを買いたい男、あたりに小銭が落ちていないか見て回る。舌打ち。

おばさんのジャージのポケットで電話が鳴る。

おばさん「あ、はいはい。もう着いた？ 駅？ 若松？ たっくんはどうしてるの？ はいはい。……もしもし、たっくん？ こんにちは～。はい、あらそうなの～。うん、うん、はい、はい、後でね～。……はいはい、あそう、じゃ家戻って着替えて行くわ。飯盛山ね、うん、はい」

飯盛山。

おばさん、飯盛山の長い階段を歩いてゆく。

男、女がベンチに座っている。

男 「中世ヨーロッパにおいて数学、とくに算術というのは、魔術の領域だった。初期のケプラーは物理学で言うところの『力』について、しばしば『霊』という言い方をした。音楽は時間を秩序づけるものとして、理数的な学問に振り分けられていた」

男 「この世界にある、何か、何とは言えない何かごちゃごちゃしたものは、それを読み解くための文法や理屈ができてようやくオカルトを抜け出して、存在を承認される。僕らが今の時点であらゆるすべての文法を発見できているだなんて言えるだろうか、言えないよね」

女 「わからない」
男 「世界を読み解く手法には流行り廃りがあるってこと。絶対だと信じられている科学、っていうのは、その一、精神との対比っていう俗っぽい二項対立的な科学じゃなくて、まあ真理の代表格みたいなものことね、それだっていずれは形を変えて、他の論理体型に淘汰されるかもしかしたら再び神学と結びつくことだってあるかもしれない。そういう知の流れの中で、幽霊や宇宙人の存在を体系付けられる文法が発見されるんなら、それらは存在しているということになる」
男 「だから、幽霊はいるんだったらいるし、いないんだったらいない」
男 「僕の回答としては、それで過不足が無いんだ」
女 「私が聞いているのは、そういうことじゃない」
男 「僕らがそのための文法を発見するかしないかだけだってこと。幽霊が確かにいるのなら、いずれはそのための論理を見つけるだろうってこと」
女 「私はあなたの感覚を聞いたんだよ」
男 「僕の感覚では、そうなの。そうなってるの」
女 「いるの、いないの」
男 「そんなのは、たいした問題じゃない」

喫茶室 KURA 店内。

圭子、厨房と店内を隔てるカウンターを片付けながら話をしている。

西と伊織、厨房で作業をしながら圭子の話を聞いている。

圭子 「だってそんなね、賞味期限まだ切れてないのをね、大丈夫！？なんて大声でお客様の前で……あたし、そんなのとんでもない！と思ってその人の襟首うしろから掴んで奥に引っ張り込んだのよ！」

圭子「あ、いらっしやいませー」

圭子、カウンターを離れ、客を二階席へアテンド。

女性客1、2が向かい合ってひとつのパフェをシェアしている。

女1 「ああああ」

女2 「なにになになに」

女1 「落ちちゃう、生チョコっぼいのが」

女2 「あっ」

女1 「……ハナクソのように落ちたね」

女2 「そんなことってある？」

女1 「うん？」

女2 「よしんばハナクソだったとして、これがね」

女1 「ふふ」

女2 「今みたいな落ち方する？」

女1 「んっふふふ」

女2 「ふふ、あんたが先に言ったんじゃない」

女1 「『よしんばハナクソだったとして』って……くっ、ふふ…でも鼻からフンってしたらホロって落ちることあるよね？」

女2 「そんなことある？ そんなことってある？」

女1 「あるよ……ふっ」

女性客1、ヒクヒク笑う。

西 「これ包み方教えてください」

伊織 「あ、アルミホイル？」

圭子がカウンターに戻ってくる。

圭子 「二階、三名オーダー待ちです」

客に呼ばれる圭子。

圭子 「はい」

客のオーダーを聞く圭子。

圭子 「はい」

圭子 「ワンオーダー通します。追加でコーヒーゼリーです」

西 伊織に向かって「……あ、俺やりますよ」

伊織 圭子に向かって「鍵見てない？」

圭子 「ん、無いの？」

圭子 お絞り、水を手早くお盆にセットしながら「鞆は？ ポケット」

伊織 「うーん」

女性客2 「すいませーん」

圭子 「はい！」

女性客2 「ここ煙草吸ってもいいですか？」

圭子 「どうぞどうぞ、あ、灰皿ありますか？ 今お持ちしますね」

圭子、女性客のテーブルに灰皿を届け、そのまま二階へ。

圭子、二階席のオーダーを通しに再びカウンターへ。

昼時の賑わい。

さまざまな声が飛び交う。

「あそこにも何かあるよ」

「どこ？」

「只見線が復旧して」

「能面だね」

「城下町の人ねえ、外の人間嫌うからねえ」

「行けばそうやって行け行け言われっから行けないでしょ」

「裏磐梯」

「長谷部さんこの娘よ」

「福島県が三分の二、JR 東日本が三分の一を負担するんですって……」

「あの茄子、真横に切ってグッとするとジュワってお水が」

「何にも言われなくて放っといってくれるんなら行けるかもしれないけどやっぱり言われっから」

「どれかひとつの真似してみて」

「あそこの旦那さん、もう6年前でしょう」

「吾妻山の雪うさぎがまんまるに肥ったら……」

「会津には関係ない」

「田植え」

伊織 「レモン切ってる？ これ、西くん」

西 「はい」

伊織 「アイスレモンティーだよねこれ」
西 「こっち、切っております」と、レモンを添える。
圭子 「もういける」
西 「はい、いけます」
圭子、ドリンクの載ったお盆を持って二階席へ。

伊織 フライパンを揺らしながら「トマトソース出してくれるかな」
西 「あ、はい」

また、さまざまな声が聞こえる。
「何もライフラインの在り方に意見をしたいわけじゃないけれども」
「こうね、って馬のタテガミんとこの脂身のことよ」
「災害時の迂回ルートに活かされる場面だって大いにその可能性がある」と知れば、
「都市部の生活には無関係に思える地方在来線も、そう無視することはできないはずなんです」
「来年の浜開きには」
「毒ガス地帯だけど別に規制はしてないから」
「こないだ冷凍品いただいたの食べたらなんだか筋っぼくて……」
「切り方なのかね、切り方」
「提灯行列」
「天守閣の収蔵品展、22日で終わっちゃったわよ」
「自転車の人は息止めて全速力で走ってくださいって言われるだけ」
「こう、筋繊維を断つように」

圭子、カウンターに戻り、お盆からティーカップをソーサーごとカウンターに置く。
圭子 「伊織さんごめん、これひとつ多かった」
伊織 「ん？」
圭子 「ホットふたつで良かったの」
圭子 上を指差して「三名で、ひとりアイスレモンティ」
伊織 「ああそう、そっか、飲んじゃって飲んじゃって、もったいないから」
女性客 「すいませーん」
圭子 「はい」
女性客 「お会計お願いします」
圭子 「はい、ご一緒ですか？ 別々ですか？」と聞きながらレジへ。

圭子、戻ってきてティーカップを取り、キッチンの勝手口へ。
圭子、紅茶を飲んで一息つく。

ジャンプを買いたい男が勝手口の外に立っている。
圭子 「あらやだ」
ジャンプ 「悪い」

圭子、ジャンプを買いたい男を中に入れる。
圭子 「何また喧嘩したの？」
ジャンプ 「金貸してくんない？」
圭子 「あげないわよ」

ジャンプ「借りるだけ」
圭子「おんなじことでしょ」
ジャンプ「100円だけ」
圭子「だめよ。ごはんならあげるからどっか適当に座んなさい」

伊織「や」
ジャンプ「ども……」
圭子「伊織さんごめん、私のぶん半分食べさせてもいい？」
伊織「作るよ」
圭子「いいっていいってそんなの」
伊織「西くん、ソース足りてるよね」
西「あ、はい」
伊織「ついでだから」
圭子「そーお？ ごめんねえ」
圭子「ほらあっち座って」
圭子、カウンターに座ろうとしたジャンプ男をすみの二人席に座らせる。
世界が圭子の視点になり、配置が変わる。

伊織、4人分のナポリタンを用意する。
西、圭子、それを取り（圭子は二人分）、伊織を含めてめいめい好きなタイミングで食べ始める。

ナポリタンを行儀悪くするジャンプ男に、圭子がひそひそ話をするように話しかける。
圭子「ね、聞いてくれる」
ジャンプ「ん、んん」
圭子「こないだあたし婚活サイトに登録したの」
ジャンプ「んん、んん、んーん」
圭子「それでいま連絡取り合ってる人がいるんだけど、40代前半でね、金融関係勤務、年収一千万」
ジャンプ「んーんーんっんーんん」
圭子「えーなに？」
ジャンプ「……年収一千万って」
圭子「うんうん」
ジャンプ「年収一千万て（笑）て思わん？」
圭子「そうお？」
ジャンプ「いや、年収一千万て」
圭子「疑わしいか」
ジャンプ「いや嘘くさいとか、そういうことより、なんか頭悪い言葉っぽくね」
圭子「そうお??」
ジャンプ「年収一千万！ って。はは」
ジャンプ「数の大きさがわからない小学生がよく適当なこと言うやつみたい」

圭子「まあー、あんまりピンとこないもんね、一千万て」

圭子「やっぱりやめといたほうがいいかな」
ジャンプ「好きにすれば」

ジャンプ「……仮にオレがその年収一千万だったとして、まじめに恋愛がしたいと切実に願ってたとする」

圭子 「はい」

ジャンプ「だとしたらプロフィールに、年収一千万とは書かないよ」

圭子 「え」

ジャンプ「年収一千万ってのはむしろ隠すな」

圭子 「なんでよ」

ジャンプ「40代前半、独身、金融業界勤務、年収一千万」

ジャンプ「アラサー・アラフォー女子釣り放題」

圭子 「そうねえ」

ジャンプ「それで恋愛？ なんてできるかよ、年収一千万に釣られる女とどう恋愛するんだよ」

圭子 「やっだー、うふふ」

圭子 「恋はお金じゃないってことね！」

ジャンプ「ちがう、そうじゃない」

圭子 「あ、でもね、あたしは恋愛がしたいんじゃなくて結婚がしたいのよ」

ジャンプ「うーん……」

西 ポモドーロソースを入れたキッチンポットを取り「これ一回洗っちゃいますか」

伊織 「うん、洗っちゃおうね。もう一個のほうまだ大丈夫」

西 「大丈夫ス」

ジャンプ男も食器を洗うなどしてしばらく厨房の手伝いをする。

ジャンプ男、店を出る。

昼の混雑が去り、厨房を掃除する西と伊織。

圭子はすっかり冷めたナポリタンを食べながら売上を計算する。

伊織が圭子に何か言い、圭子が西に何か言い、西は厨房の奥へ行き、戻ってくる。

西 メモを読み上げ「レモン、砂糖、チーズ……」

圭子 まかないを片付け、腰のエプロンを取りながら「うん、はいはい、トマトは？」

西 「見てないス」

圭子 「今朝まだパックひとつあったでしょ？」

西 「はい」

圭子 「じゃあ大丈夫ね。セットそんなに出てないから」

西 「はい」

圭子 「じゃあ行ってきます」

伊織 「自転車？ 鍵は？」

圭子 「あるある」

圭子、出て行く。

最後の客が席を立ち、圭子の代わりに西が対応する。

西 「……1350円です」

神社の境内。

ジャンプ男が賽銭箱の裏に隠れている。

飯盛山で女と話していた男がやってくる。

男、鳥居で一礼し、手水舎へ。手を清め、本堂へ。縄を持って鈴を鳴らし、礼拝。

男 「あの子とうまくいきますようにうまくいきますようにうまくいきますように……」

男、賽銭を投げる。

ジャンプ男、賽銭箱の後ろから手を伸ばして空中で賽銭をつかむ。

男 「!!!」

男 「俺のお賽銭！」

世界がジャンプ男の視点になり、配置が変わる。

ジャンプ「手放した時からもうおまえのもんじゃないからな。神様に投げたんだって言うんなら、もう届いたよ。そう思えば誰も不幸じゃない」

ジャンプ男、本堂から降りて表参道を抜けようとする。

ジャンプ男、ふと小さな池に近づく。

ジャンプ「お、何だ、ここにもたくさん沈んでたんだな。もったいねえ」

男、ジャンプ男を突き飛ばす。

ジャンプ「……フン」

ジャンプ「取らないよ、俺はこれで間に合うから」

ジャンプ男、飄々と去っていく。

男、靴を脱いで池に入り、小銭を拾い集める。

濡れた小銭を賽銭箱めがけて何度も投げる。

能舞台。

シテ（龍神）がひとり。

無音で踊る。

世界がシテ（龍神）の視点になり、配置が変わる。

彼を見ている客は、まばら。